

論文

日本語能力試験 2 級レベルの学部留学生在が抱える問題点

—— 理工系学部留学生的のケーススタディ ——

水本光美・池田隆介

北九州市立大学国際環境工学部

〒808-0135 北九州市若松区ひびきの 1-1

E-mail: mizumoto@env.kitakyu-u.ac.jp

ikedata@env.kitakyu-u.ac.jp

**Problems of Undergraduate Foreign Students
at the 2nd Level of the Japanese-Language Proficiency Test:
A Case Study of Science-and-Engineering Foreign Students**

Terumi MIZUMOTO, Ryusuke IKEDA

Faculty of Environmental Engineering, The University of Kitakyushu

1-1, Hibikino, Wakamatsu-ku, Kitakyushu-City, 808-0135 JAPAN

日本の理工系の大学学部留学し、日本語の学習と平行して学部の授業を受けている留学生的の実態について、「日本語能力」と「大学の学部教育を受ける能力」の 2 点から、分析と考察を行った。入学時に日本語能力試験 1 級に達していたか否かという基準で留学生的を 2 つのグループに分類して調査したところ、日本語能力試験 1 級に達していないグループ、つまり、日本語能力試験 2 級合格レベルの学生は、入学時に 1 級レベルの学生に比べて日本語能力に半年以上の遅れがあることが明らかになった。また、物理や数学などの理系科目の素養を持っていたとしても、学部入学後の 1 年生の授業全体の成績は日本語能力に比例するという結果を得た。このことは、物理や数学などの能力が高くて、十分な日本語能力がなければ日本の理工系大学学部の教育についていけないということを示している。

キーワード：理工系学部、日本語能力試験 2 級レベルの留学生的、日本語能力、学部教育を受ける能力、日本留学試験

1. はじめに

これまで、学部に入學してきた留学生的は、日本語能力試験（以下、日能試）1 級に合格していることが前提とされており、学部は留学生的の高い日本語能力に依存したカリキュラムを編成しておけば、問題は生じないはずであった。しかし、理系の留学生的をとりまく現場を見てみると、ゼミへの参加、資料の読解、日本語での報告、論文の執筆、授業の聴講など、予想以上に

高度な日本語能力が期待されているという結果が報告されている（因 他 1998）。専門教育を行う側は、留学生的に一定以上の日本語能力を求めており、現実的には、留学生的に高度な日本語能力がなければ十分な教育は行えないのである。

日本留学試験の施行や「国際」を冠とする大学の増加は、従来とは日本語能力の異なる学部留学生的を作り出してしまうであろうと予測される。とりわけ、専門

的な内容の文章を読んだり講義を聞いたりして理解する日本語能力が不十分なまま入学してくる留学生の増加に対応することは急務の課題である。留学生本人にとって勉強が困難になるというだけではなく、せっかく受け入れた留学生が学部教育の内容を吸収できないという事態は、学部にとって大きな損失である。

本稿では、まず日本語能力試験、そして日本留学試験について、先行報告を参考にしつつ、近い将来における日本の大学学部の留学生受け入れの状況と課題を予測する。続いて、従来の学部留学生よりも日本語能力が相当低い留学生を受け入れた大学学部のケーススタディとして、著者の所属する北九州市立大学国際環境工学部（以下、国際環境工学部）における留学生の実態を紹介し、日本語能力が従来よりも低いレベルの学部留学生が直面する困難を「日本語能力」と「学部教育を受ける能力」の2点から浮き彫りにする。そして、最後に、変容していく学部留学生に対処するための今後への課題を述べたい。

2. 学部における留学生受け入れの将来像

2-1 日本語能力試験

日能試は、日本語非母語話者を対象に日本語能力を測定し1~4級の能力レベルの認定を与え、同時に大学の入学選考にも活用されてきた。特に、1級については、試験の構成・認定基準において、日本語能力の測定のみならず、大学入学選考という目的でも利用できるように配慮されている。しかし、この試験の「あり方」には問題点も指摘されている。今後の日本語教育施策の推進に関する調査研究協力者会議(1999)における日能試についての報告によると、「1級合格者に対する大学側の期待と、実際にこれに合格した者の日本語コミュニケーション能力との間には開きがある」とのことである。この報告においては、日能試の受験者の全てが留学希望者ではない(1級受験者の30%、2級受験者の4%が大学受験予定者)ことから、「日本語能力試験は本来目的とする日本語能力を測定するための試験へと特化」し、留学生の入学選考には「日本留学のための新たな試験」を創設することで対処しようとの方針が定められたとされている。この「日本留学のための新たな試験」は、「日本留学試験」として平成

13年度11月に試行試験が行われ、平成14年度6月に第1回の本試験が実施されたばかりである。

2-2 日本留学試験

では、今後の学部留学生の受け入れに多大な影響を与えるであろう日本留学試験(以下、新試験)について見ていきたい。

この試験は「聴解」「聴読解」「読解」「記述」の4領域から編成されており、日能試では測定できなかったキャンパスでのコミュニケーション能力や文章の再生能力を測定しようと試みている。日本国際教育協会から平成13年度日本語能力試験との換算表も提出されており、これによると新試験の「日本語」で219点をとっていれば日能試1級合格(280点)と同等とみなされている。しかし、嶋田(2001)は、二つの試験の相関関係がかなり疑わしいことを示す事例を数多く紹介している。嶋田は、学習者に新試験の公開問題と日能試の両方を受験させ、学習者一人一人の2つの試験結果を対応させて表を作成した。表1は、その嶋田の報告をもとに作成した、新試験の得点と日能試の得点の差が特に大きかった学習者のリストである。

S7以下の学習者に注目すると、これらの学習者は日能試1級280点未満、つまり、1級に合格できないレ

表1 留学生試験と日本語能力試験1級の得点

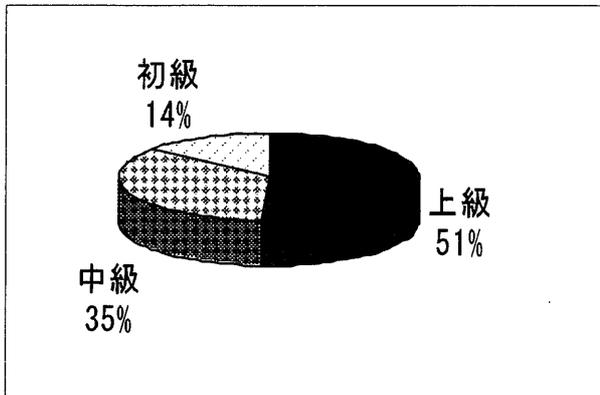
学生	留学生試験<公開問題> 実施結果 2001/7/16		日本語能力試験1級の 成績(1998年度)	
	(400点満点)			
S1	394点	219点以上 ↓ 能力試験1級 合格レベルと みなされる。	328点	合格
S2	354点		310点	
S3	344点		295点	
S4	342点		280点	
S5	336点		288点	
S6	334点		284点	
S7	332点		253点	不合格
S8	328点		220点	
S9	308点		270点	
S10	298点		274点	
S11	286点		251点	
S12	278点		235点	
S13	278点		229点	
S14	274点		216点	
S15	260点		200点	

※嶋田(2001)をもとに表を作成

ベルの学習者であるが、新試験においては 219 点以上の得点を取っている。すなわち、新試験の得点では「日能試 1 級レベル」とみなされてしまう学習者である。

こういったケースは例外的なものではない。

図1 日本留学試験 260 点以上の学習者の内訳



※嶋田(2001)をもとに表を作成

図1は、嶋田(2001)のデータから、新試験の 260 点以上の学習者をとりあげ、レベル別に割合を出したグラフ*1である。このデータ中に、新試験で 260 点以上をとった学習者*2は 120 人いたが、その中で、実際に日能試 1 級に合格している上級学習者は 51%、約半数で、残りは日能試 2 級以下であろうと思われる初級・中級の学習者で占められていた。このことは、日能試 2 級、もしくは、3 級レベルの学習者でも、新試験では「1 級に相当する」と換算されてしまう可能性があることを示している。

このデータは、日能試 1 級にあたる日本語能力を想定した留学生を採用しようと新試験を導入した学部でも、実際には 2 級レベルの留学生が入学してくる可能性が極めて高いことを証明している。

確かに、日能試 1 級に合格しても十分なコミュニケーション能力がないため留学生活で苦勞をする者がいるという問題はある。しかし、新試験により、キャンパスライフを送るのに不自由ないコミュニケーション能力があると判断されたとしても、学部入学後の授業の内容の理解度という点では不安が残るといわざるを

えないのである。

先にも述べたが、日能試は、大学生活に必要なコミュニケーションができるか否かを判定しきれないとの問題点が指摘されている(今後の日本語教育施策の推進に関する調査研究協力者会議 1999)。しかし、従来の一般的な大学学部では、原則として、「1 級合格」以上の日本語能力の留学生を受け入れてきたという事実を踏まえて考えると、この「1 級合格」という基準は学部教育に適応しえるだけのアカデミック・ジャパニーズの素地がある、つまり「学部の講義を聴いたり、教科書を読んだりして理解できる日本語能力がある」ことをある程度妥当に測定していたのではないかと思われる。このアカデミック・ジャパニーズの素地ができていたとの判断は、大学入学選考に活用される試験にとって必須の要素である。

本稿は、ここで、新試験そのものの判定基準に問題があると主張しようとしているわけではない。新試験は、従来の日能試では扱えなかった技能の測定を可能にしており、日本への留学に対応した試験として導入された。ただし、測定される能力が日能試とは異なっており、新試験によって日能試 1 級と 2 級とを弁別できると期待することはできない。一応、換算基準が国際教育協会より提示されているが、これはあくまでも基準であり、嶋田のデータを見ても、この 2 種類の試験の相関関係は低いものと考えられる。新試験は、ある面では日能試の不備を補っている点も見られるが、アカデミック・ジャパニーズの素地があるかどうかの弁別機能についてはまだ不明の点が多い。新試験の導入は、日能試の 1 級相当の留学生と 2 級相当、あるいはそれ以下の留学生を学部内に混在させることにつながっていくのではないかとと思われる。

2-3 今後の学部留学生の受け入れ

日本の大学に学部生として留学する場合、入学判定の一つの重要な材料として一般に日能試 1 級という基準が存在していた。これに満たないレベルの学習者は、日本語でのアカデミックな活動が困難とされているが、近年、定員の一定数を留学生で満たすことを前提とする大学・学部が作られており、現実的には、1 級レベル未満の留学生も受け入れようとする傾向が、今後、

*1 初級・中級・上級の区別は、嶋田(2001)のデータにおける日能試の点数をもとに判定。上級に分類したのは日能試 1 級の合格基準以上の学習者である。

*2 「新試験で 260 点以上」のデータしか出していないのは、嶋田(2001)において報告されているデータにはそれよりも低い点数の学習者がいないため。

日本全国で強まっていくと見られる。

また、先に述べたとおり、新試験の施行にともない、この傾向が一層強まるのではないかと考えられる。

多くの学部は、従来のように、日能試1級レベルを想定して留学生の教育環境を整えている。しかし、1級を下回るレベルの留学生が大量に学部入ってくると予測されながら、そこから生じる困難については、十分に論じられていない。そこで、私たちは、本学部におけるケーススタディをもとに、この困難さを具体的に提示したい。

3. 国際環境工学部における学部留学生

3-1 留学生の分類

北九州市立大学国際環境工学部は、H13年4月に新しくできた学部であり、初年度は27人の中国人留学生が入学し、4月入学時点での日本語能力から2つのグループに分類された。表2のとおり、12人が日能試1級レベル、15人が2級レベルというのが学部開設当初の状況であった。

表2 国際環境工学部 2001年度入学の留学生の日本語能力

入学時の日本語能力	人数
日能試1級レベル	12人
日能試2級レベル	15人

国際環境工学部では、この2つのレベルの学習者が、両者とも同時期に学部での履修登録を始め、学部の授業を同時期に受ける。この状況は、今後、日本語能力の低いレベルの留学生を受け入れようとしている学部の将来像を示唆しているものと考えられる。そこで、国際環境工学部の事例をもとに、近い将来の理工系学部の留学生の実態を考えたい。

2級レベルというのは、従来の学部留学生よりも日本語能力が相当低いと考えられるため、本学部では、特別な選抜プログラムに基づき、これらの留学生の受け入れに備えている。入学の前年の4月に、日本語以外の理系の各教科(数学・物理・化学・生物)の能力の測定が母語(中国語)で行われ、優秀な成績を収めた者、すなわち、日本語能力は不十分でも、理系の基礎知識が豊富な学生だけを選抜した。当初は、日本語能力は期待できないが、理系の素養は高いので、学部の授業を受けるのにそれほど大きな支障はないである

うと考えられていた。しかし、日本語能力が劣っていることは明らかであり、カリキュラムの上でも、彼らのために特別な配慮を行う必要があった。

3-2 国際環境工学部の留学生の日本語学習背景

先にも述べたとおり、国際環境工学部の留学生は、入学時(2001年4月)の日本語能力により2つのグループに分類される。

日能試2級レベルの留学生は、入学前年の5月に、ゼロ初級のクラスから日本語学習を開始し、以後、入学までに、母国(中国)において35週間(910時間)の日本語学習の特別コースに参加していた。また、入学後は、10人未満の少人数クラスで週12時間の日本語の授業を受けている。内容も、表3に挙げられているように、学生の専門に関連するようなトピックを選び、親しみやすいよう配慮している。当然、日本語能力的にも2級相当の段階から各技能を積み上げて学習できるように計画してある。

表3 国際環境工学部「総合日本語基礎」のシラバス

教 育 内 容	1. 文法(重要表現)	一つのトピックに沿って、1から7までをスパイラルに学習。
	2. ドリル(演習)	
	3. 読解(精読)	<トピック例> a. 間取り b. 習慣 c. 就職
	4. 読解(速読)	d. 日本の大学生 e. 日本の子供
	5. ディスカッション	f. 男と女 g. 中国経済 h. 地球環境
	6. 会話	i. Eブック j. ネット犯罪
	7. 聴解	k. 遺伝子組換え l. その他(小説など)
	8. ビデオ	主に大意取り
	9. ストラテジー	情報収集の仕方、ノートの取り方、質問の仕方、相槌の仕方、講義の聞き方、レポートの書き方、試験の受け方、など。

※「総合日本語基礎」は日能試2級レベル対象のクラス

一方、日能試1級レベルの留学生は、個人差はあるが、入学前年の5月の段階で、すでに母国において半年から3年程度の日本語学習歴を有しており、日本語能力も日能試2~3級レベルに達していた。そして、5月から母国で35週間(720時間)の特別コースに参加し、入学後、10人未満の少人数クラスで週6時間の日本語の授業を受講している。

これまでの学習時間の差と日本語能力の差をできるだけ早く解消すべく、入学直後の1学期間の日本語教育は、日能試2級レベルのクラスは1級レベルの倍の

時間数を取っているのである。

3-3 日本語能力の差

入学時に日能試2級レベルの留学生と入学時に1級レベルの留学生は、両者とも国際環境工学部において「総合日本語Ⅰ」という科目を履修した。1級レベルは前期、2級レベルは後期にこの科目を履修、つまり、2級レベルは半年遅れて履修しているのである。この科目の期末試験の成績を比較したのが表4である。入学時に1級レベルだった留学生は今年の7月に平均76.05%という成績だったが、2級レベルの学生は、今年の2月になってもそのレベルに達しておらず、平均62%程度という結果に終わってしまった。すなわち、2級レベルで入学してきた学習者は、1級レベルで入学してきた学習者に比べ、半年以上の遅れがあると言える。

本国における予備教育の期間、そして、来日してからの日本語教育の期間を合計すると、2001年度前期終了の時点で学習時間1000時間を超えており、目安としての1級レベルの基準は越えている。そのため、「総合日本語Ⅰ」の履修には問題のないレベルであると判断される。にもかかわらず、半年遅れて受講した同一の日本語の科目でこれだけの大幅な差が生じている。このことは、入学時の日本語能力の差は短期間では縮めることができないということを示している。

表4 国際環境工学部「総合日本語Ⅰ」期末試験の成績

グループ	成績(%)	試験時期
1級レベル	76.05	1年次前期 2001年7月
2級レベル	61.98	1年次後期 2002年2月

※「総合日本語Ⅰ」は能力試験1級レベル対象のクラス

3-4 学部の授業の成績

次に、留学生の日本語能力のギャップが理系の学部教育に与える影響について検証する。

結論から述べれば、実際は、日本語能力と学部の授業全体の成績が比例している関係にあることが明らかになった。

国際環境工学部には、いわゆる「一般教養課程」は設置されておらず、1年次の科目も大半が専門教育の導入科目となっており、工学部の学生にとって全くの

「専門外」である授業を履修する機会はあまりないのが実際の状況である。

先にも述べたが、国際環境工学部に入学した留学生は、1級レベルのグループも2級レベルのグループも、中国国内で理系の科目の成績が非常に優秀であり、本学部の講義を受講するに十分な基礎知識が備わっていると認定された学生である。したがって、日本語能力の差があったとしても、学部の授業を履修するのに十分な力はあると期待されていた。

本学部ではGP(Grade Point)制度を導入しており、これで成績を判定している。表5のように成績が点数化され、卒業をするためにはGPA(Grade Point Average)が1.5以上必要であると定められている。故に「1」「2」ばかりでは、単位は取れたとしても、非常に不安な成績であると言える。

表5 GP制度

成績表示		GP
優	A	4
	B	3
良	C	2
可	D	1
不可	F, G	0

ところが、留学生の現状を見てみると、1年生の時点で「非常に不安」と認めなければならない者が多数出現することとなった。

表6は留学生のGPAを集計したものである。入学時に日能試1級レベルの留学生は、累積のGPAが約2.5という成績を収めているのに対し、入学時に2級レベルだった留学生のGPAは、前期に2.32、後期に2.01、累積で2.15となり、1級レベルとの開きが相当に大きいことが判明した。

日本人を含めた全学生の平均を表7に示したが、前期よりも後期の方が数値が上がっている。このことが

表6 留学生のGPA

グループ	前期	後期	累積
1級レベル	2.67	2.40	2.54
2級レベル	2.32	2.01	2.15
留学生平均	2.48	2.18	2.33

※2001年度国際環境工学部1年生

表7 全学生(日本人学生+留学生)のGPA

グループ	前期	後期	累積
全学生平均	2.79	2.86	2.81

※2001年度国際環境工学部1年生

ら、授業の内容が後期になって極端に難しくなったのでないことは確実である。しかし、留学生の成績は軒並み低下し、中でも入学時に2級レベルの留学生の落ち込みの度合いは1級レベルの留学生に比べて大きい。

日本人学生や、1級レベル留学生は、授業を履修しながら、知識も積み上げていき、さまざまな能力を身に付けることができる。だが、入学時に2級レベルの留学生は、授業に出席はしていても内容を理解できないために悪い成績しか取れず、内容がわからないので当然新しい知識も技術を身につけていくこともできない。そうして、時間がたち、後期になるとさらに成績を悪くしてしまうという悪循環が起こる現実が、これらのデータによって明らかにされている。

また、ポイント「0」つまり「不可」の数を見ても日能試2級レベルの留学生が極めて難しい立場に置かれていることが明らかである。

表8 留学生の「不可」の科目の延べ数

グループ	前期	後期	累積
1級グループ	16	14	30
2級グループ	9	33	42
計	25	47	72

※2001年度国際環境工学部1年生

表9 留学生一人あたりの「不可」の科目数

グループ	前期	後期	累積
1級グループ	1.33	1.17	2.5
2級グループ	0.6	2.2	2.8
留学生平均	0.93	1.74	2.67

※2001年度国際環境工学部1年生

表8*1は留学生が「不可」を取った授業の延べ数を集計したもので、27人の留学生が1年間に延べ72の授業で「不可」を取っているという結果が出ている。特に注目すべきは、2級レベルの留学生の後期の例で、前期の3倍以上もの「不可」を取っている。2級で入学してきた学生は、前期こそ持ちこたえたものの、後期になり授業についていけなくなり、一気に「不可」が増えたという現状が反映されている。これを留学生

*1 前期の1級グループの「不可」の数が「16」と2級グループよりも多くなっているが、これは、1名の留学生(1級グループ)が一身上の都合により不登校状態となった特殊な学生の成績が影響したものである。この学生の例を除外すると、1級グループの「不可」の延べ数は、前期は「6」、後期は「10」、累積で「16」となる。

1人当たりの割合に換算してみると(表9*2)、留学生は1人当たり、年平均2~3科目「不可」を取っていることになる。これを見ても、2級グループは、前期の0.60という数値が後期には2.20となり大幅に成績が落ち込んでいることが明らかである。

この72の「不可」の科目の一覧は表10のとおりである。この中で網掛けをしてある科目は「専門導入」の授業である。先にも述べたが、国際環境工学部には「一般教養課程」は設置されていないが、網掛けをしてない科目は、どちらかといえば「基礎教養的」な要素の強い授業と考えられるものである。

表10 留学生の「不可」の科目一覧

	科目名	人数
基礎教養的	アジア地域入門	9
基礎教養的	経済学と環境問題	5
基礎教養的	総合日本語I	3
基礎教養的	日本事情I	1
基礎教養的	日本事情II	1
基礎教養的	日本事情III	1
基礎教養的	日本事情IV	4
基礎教養的	生涯スポーツII	1
基礎教養的	技術日本語基礎	1
専門導入	基礎生物化学	3
専門導入	基礎化学	1
専門導入	電気工学基礎	3
専門導入	数学IA	3
専門導入	数学IB	7
専門導入	数学IIA	4
専門導入	数学IIB	5
専門導入	情報処理学・演習II	5
専門導入	力学基礎	1
専門導入	物質循環論	1
専門導入	情報メディア環境論	1
専門導入	環境問題特別講義	1
専門導入	物理実験基礎	1
専門導入	環境造形演習	2
専門導入	微分力学I	4
専門導入	環境計画学	1
専門導入	材料強度学	3
	合計	72

この「基礎教養的」な授業と「専門導入」のための工学的な素養のより強い授業に分類して不可の数の変動を観察したものが表11である。表11を見ると、「基

*2 ※1の理由と同様、特殊な学生の例を除外すると、1級グループの1人当たりの「不可」の数は、前期は「0.55」、後期は「0.91」、累積で「1.45」となる。

表 11 基礎教養的授業と専門導入的授業ごとに分類した留学生の「不可」の延べ数

	基礎教養的		専門導入		合計
	前期	後期	前期	後期	
1級グループ	5	5	11	9	30
2級グループ	3	13	6	20	42
合計	8	18	17	29	72

基礎教養的」な授業、「専門導入」の授業のいずれにおいても2級グループの不可の数の増加が顕著であることが分かる。

専門性を生かすことが時として困難となることもある「基礎教養的」な授業では、語学の力が成績の障害となることは当然予想される事態であり、予想通り2級グループの成績の悪化が見られる(「不可」の数が前期の「3」から後期の「13」に増加)。しかし、比較的専門性が高く、言語以外の既存の知識を用いて対応できるはずの「専門導入」の授業(これらの授業は国際環境工学部に所属する留学生の専門に深く関連しており、彼らの専門性が活用できるはず)を見てみても、1級グループは「不可」の数が微減したのに対し、2級グループは3倍以上に「不可」の数を増やしている。このことから、授業が一般教養的な科目であっても、より専門に密着した科目であっても、日本語能力と成績との相関関係が高くなっているであろうことが予測される。

実際、日本語の成績と GPA との相関を出したところ、前期 ($r=0.57$) よりも、後期 ($r=0.74$)、及び、累積($r=0.70$)のほうが相関が高いという結果を得た。日本語の力がない学生ほど「不可」の数が多くなっていくという傾向が、今後、年度が進むにつれてよりはっきりしてくるのではないかと考えられる。

年度開始時には、ある程度日本での生活に順応し、日本語も上達するであろう後期には挽回するかと期待されていた。だが、2級レベルの留学生の多くは時間が経つにつれ、むしろ困難な状況に追い込まれている。彼らの日本語能力の向上の速度は、学部教育が要求する知識の量の増加に追いついていけず、取り残されているのである。

3-5 本学部の事例のまとめ

以上のように、国際環境工学部のケースでは、日能

試1級に満たないレベルの留学生は、数学や物理や化学の素養が相当あるにもかかわらず、日本語力の不足が単位取得に直結しているというシビアな状況におかれている。国際環境工学部においては、先に述べたとおり、日本語能力の低い留学生が入学してくることを想定していたため、日本語教育に関しては、入学後2級レベルの留学生用のカリキュラムを準備し対処したにもかかわらず、2級レベルの学習者は困難な状況に突き当たってしまった。

日能試1級レベルの壁を超えられないままに、留学生が学部の授業を受ける場合、以上のように多大な困難と向き合うことになるのである。

4. 今後の課題

今後、日本の他大学では、本学部とは違い、「意図しない」状態で、日能試1級未満の留学生が入ってくるケースが出てくるであろう。新試験の導入により、日能試1級程度と判定したつもりでも、実際にはその能力未滿で留学生が学部に入ってしまうという事態である。この場合、「意図しない」状況であるために、さらに深刻な事態になることが予測される。1級レベルの留学生のみをターゲットにして教育環境を整えてきた大学学部は、現在、国際環境工学部が突き当たっている以上の困難に立ち向かわなければならなくなるであろう。これは、日本の大学で教育を受けたいと熱望している留学生にとっても、効率よく教育を施したい学部にとっても、これは好ましかからざる状況である。

新試験の目的・意図・試験内容については、従来の日能試の欠点を克服して改善されたところが多数あり、本稿はこの試験を一義的に批判しているわけではない。ただし、新試験を通じて測定される能力は、日能試のそれとは異なるということを十分に認識する必要があるとの指摘はしておきたい。つまり、新試験で高得点をとって学部に入ってくる留学生は、これまでとは、日本語能力の判定の質が違っているということを踏まえて、シラバス、カリキュラムを編成する必要が出てくるであろうということである。

新試験の導入により、今後、ますます「1級」と「2級」の間の区別が非常に曖昧になっていくであろう。しかし、国際環境工学部の事例を見れば、1級レベル

とそれに満たないレベルとでは、大学の授業を受ける上で著しい困難の差が生じていることは明らかである。

以上をふまえ、学部教育の効率と質を維持するには、留学生を受け入れる際、日能試1級と同等レベルの能力を入学判定基準として定めておく必要があると提言したい。もしくは、2級レベルの留学生を受け入れるケースを想定し、それに応じた体制を、学部全体で整えておくべきであろう。そうすることによって、日本語教育、ひいては、専門教育の双方の分野において、留学生の直面するであろう学部教育上の課題に意識的に対処できるという点で高く貢献できるものと期待される。

【参考文献】

- 1) 因京子・上垣康代・栗山昌子・吉川裕子: 大学院レベルの日本語予備教育に求められるもの—日本語の到達度は何を示すのか—: 日本語教育: 99号: pp.120-130: 1998
- 2) 今後の日本語教育施策の推進に関する調査研究協力者会議: 今後の日本語教育施策の推進について—日本語教育の新たな展開を目指して—<再録>: 日本語教育年間 2000: くろしお: pp.493-494: 1999
- 3) 小出慶一: 日本語能力試験の目指したもの、目指す

英文要旨

The purpose of this paper is to discuss the problems of undergraduate foreign students who belong to the faculty of science and engineering. In order to analyze and consider the problems, we classified the foreign students into two groups: students at the 1st level of the Japanese Language Proficiency Test and students at the 2nd level of it.

Then we found two important facts. The first is that students at the 2nd level fall behind more than half a year in “skills of Japanese language” than students at the 1st level. The second is that “skills of understanding introductory lectures in special fields” should be improved as Japanese proficiency is improved, because the grade point averages of the undergraduate foreign students were proportional to their grades in Japanese language classes. These two facts suggest that undergraduate foreign students without sufficient Japanese proficiency cannot catch up with the lectures in special fields of science and engineering faculties at Japanese universities, even if they have enough knowledge of subjects such as physics, mathematics and chemistry.

もの<パネルセッション>: 日本語教育秋季大会: 名古屋大学: 予稿集 pp.279-290: 2000

- 4) 嶋田和子 (イーストウエスト日本語学校): 大学と日本語学校との日本語教育上の連携を考える—「日本留学試験」をめぐる—: 国立大学日本語教育研究協力者会議: 2001

- 5) 国際教育協会ホームページ <http://www.aiej.or.jp/>

著者紹介

水本光美: 北九州市立大学国際環境工学部助教授
【経歴】ニューヨーク大学教育大学院外国語教育学専攻修士号取得。プリンストン大学およびハーバード大学日本語学科専任講師を経て 2000年1月より現職【専門】日本語教育、外国語教授法

池田隆介: 北九州私立大学国際環境工学部講師【経歴】九州大学大学院比較社会文化研究科日本社会文化専攻修士課程終了、同大学院博士課程単位取得退学、2001年4月より現職【専門】第二言語習得、日本語教育